

## 逃げたいとき、踏みとどまるという選択——信頼をつくる「ことば」と「構造」

医療福祉ジャーナリズム分野 1年 村松恵

昨年の NP 学会で、前村さんがシンポジウムに登壇されている姿を拝見しました。「こんなにもすどく、でも誠実に、医療や看護にメスを入れてくれる記者がいるのか」——そう感じたことを、今でも鮮明に覚えています。その日、会場となっていた国際医療福祉大学の存在を初めて知り、医療福祉ジャーナリズムという領域に深く惹かれ、すぐに丸木先生に連絡を取りました。

あれから1年。いま私は、あの日に感じた感動のまま、この大学院で学んでいます。

そして今回、医療福祉を伝える立場を志す者として、再び前村さんとつながることができたことに、心から感謝しています。

### 逃げたいとき、逃げずに踏みとどまるということ。

「隠さない、逃げない、ごまかさない」

その言葉には、不意を突かれるような鋭さがありました。

私は医療現場で働いています。日々のなかで、“逃げたくなる瞬間”というのは、正直に言って何度もあります。たとえば、自分の判断でよかったのか自信が持てないとき。あるいは、伝えることが怖くて、説明のタイミングを先延ばしにしたいとき。「誰かが代わりに気づいてくれたらいいのに」と思ってしまうことも、一度や二度ではありません。だからこそ、「逃げない」という言葉には、ぐっと胸をつかまれるような感覚がありました。逃げないという選択は、何か立派な行動を取るのではなく、「ただそこにとどまること」「説明すること」「向き合い続けること」——その地道な積み重ねが、医療の信頼を守っていくのだと、あらためて気づかされました。人間だからこそ、逃げたくなる。でも、逃げなかった誰かがいたことで、今も守られているものがある——その事実にも、あらためて思いを馳せる機会となりました。また、前村さんは、ある病院で起きた死亡事故についてお話しくださいました。

人工心肺のトラブル、カルテ改ざん、医師の逮捕——重く、深刻なキーワードが並ぶ中で、私が最も驚いたのは、その後に続いた展開でした。病院側と患者遺族、そして第三者である記者が一堂に会し、内部調査委員会が立ち上がったといいます。遺族も調査に参加し、報告書は何度も見直されたとのこと。何年も解決できなかった案件が、わずか数回の対話で動き出した——そんなふうにお話しされました。最終的には、患者側から「訴えないでほしい」という嘆願書が提出されたそうです。このお話を伺い、私は、医療と患者が信頼を取り戻していくということが、こんなふうになるのだと知りました。「逃げなかった」からこそ、そこに“和解”が生まれた。それは派手なニュースにはならないかもしれませんが、とても静かで、でも確かな力を持った出来事だと感じました。お話の中にあつた「誠実に、逃げずに、話し合い続ける」という姿勢。それがどれだけ困難で、でもどれだけ大きな意味を持つかを、実感を伴って受け取ることができました。

### 数字の中に潜む「異常」を見逃さないということ

もうひとつ、私の中に強く残ったのが、透析患者の死亡率に関するエピソードでした。

3年間で150人の透析患者のうち、4人に1人が亡くなっていたそうです。しかし、年間の死亡者数にするとわずか2〜3人。そのため、現場では誰も「異常」に気づいていなかったと言います。

「この数字を“見えるように”したことで、翌年、死亡者がゼロになったんです」

そう語る前村さんの声は、とても淡々としていました。

けれど、その言葉の奥には、明確な問いかけが込められていたように感じました。

——あなたは、目の前の数字に気づいていますか？

——見ないふりをしていませんか？

数字は、ただの記録ではなく「兆し」です。わかっているのに、見ようとしない。自分の都合の良いところだけを見て、判断した気になってしまう——

そんな“思考の惰性”のようなものが、自分の中にもあったのではないかと、はっとさせられました。

### 「老衰が増える社会」が、まっとうな希望に思える理由

さらに前村さんは、印象的な一言を添えました。

「死を納得できる社会をつくるには、老衰が増えるのがいい社会なんじゃないかと思っているんです」

この言葉に、会場は少しざわついたように感じました。けれど私は、とてもまっとうな希望だと感じました。

延命治療を受けるかどうか、という選択の前に、「自然に老いて、納得して最期を迎える」そのプロセスを許容できる社会の姿——それを支えるのが、医療であってもいいのではないか。

そんな想いに、私は大きくなぞきました。死を遠ざけるのではなく、どう納得して死と向き合うか。その視点に、いまの医療がもう一步近づいていけるなら、それは患者だけでなく、医療者にとっても希望になると思います。

### 「思い」は届かない？ だからこそ、構造にする

前村さんの講演の終盤、「ロジックモデル」について語られた場面が、今も強く印象に残っています。

「行政の人は、医療現場の“思い”では動かない。だからこそ、構造として伝える必要があるんです」

この言葉を聞いた瞬間、ぐうの音も出ませんでした。医療現場で働いてきた身として、「思い」の大切さを信じてきました。けれど、その「思い」が届かない壁に、幾度となくぶつかってきたことも事実です。

いま、私は「医療的ケア児の教育の選択」をテーマに修士論文に取り組もうとしています。

その中で、“共生社会の実現”や“本人・家族の意思の尊重”といった理念は、いくらでも語るができます。でも、それだけでは制度は動かない。地域も学校も、簡単には変わらない。だからこそ、必要なのは「構造として伝えること」。「なぜこの支援が必要なのか」「どんな結果につながるのか」を、因果関係で整理し、誰にでも見える形にすること。

そのための実践的なツールが「ロジックモデル」なのだ、あの瞬間、はっきり理解できた気がしました。

“感情”は現場を動かし、“構造”は社会を動かす。

研究としてまとめる以上、私はその両方を意識しながら、現場の声を丁寧に編み上げ、伝わる形にしていきたいと思います。「思い」が「構造」に昇華されることで、ようやく社会は一步動き出すのだという実感をもって。

### **医療系メディアとして、「伝えること」を医療の一部にするために**

講演の最後、前村さんが語られた言葉が、心に強く残りました。

「患者を助けたいという本来の気持ちに立ち返ったとき、

“書くこと”や“伝えること”も、医療の一部になると思っています」

この言葉には、静かでありながら、重たく深い意味が込められていると感じました。

医療というと、治療や処置といった“手を動かす行為”が中心に語られがちです。

けれど実際には、説明すること、記録すること、伝えること――

つまり“ことば”を尽くす行為も、確かに誰かを支える力になりうるのだと、あらためて気づかされました。

そしてそれは、まさに私たち医療メディアに携わる者の役割そのものでもあります。

現場の声を、専門家の知見を、患者や家族の経験を。

その一つひとつを正しく、ていねいに、わかりやすく伝える。

ときに痛みや迷いに寄り添いながら、「言葉のケア」を届ける。

それが、私たちが医療と社会をつなぐためにできる“医療の一部”なのだ、前村さんの言葉に背中を押される思いがしました。

書くこと、伝えることに、ただの情報提供以上の意味を持たせるために。

これからも、自分の言葉と視点を研ぎ澄ませていきたいと思います。